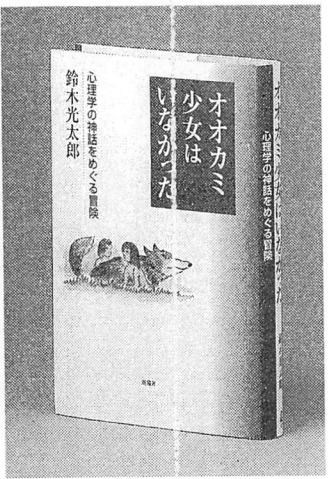


オオカミ少女はいなかった

新曜社・
2730円

「定説」が作られた真相

書名にまず驚いた。筆者が親しんだ社会学や発達心理学の入門書にもオオカミに育てられた少女の話は登場する。発見後、一人はすぐに死んでしまったが、もう一人は九年生きた。だが、オオカミに育てられたために習性はオオカミそのものの。四本足で歩き、うなり声をあげる。言葉を教えるも結局四十五語程度の語彙ごいを使えるようにしかなかった…。

こうして人間として生きる能力を身につける「社会化」の機会を逸した例として教科書に頻出する「オオカミ少女」のエピソードは、実は捏造ねつぞうだったらしいのだ。

著者は二人の少女が一九二〇年にインド東部のオオカミの巣の中で発見された経緯や、自称「発見者」で、二人の養育に当たった牧師が提出した「証拠写真」と「報告」の内容、そして、それらを著名な学者たちがチェックもせずに「人間としての成長に何が必要か」を論じる格好の素材として利用するようになるプロセスなどを注意深く分析する。

その作業を通じて二人が重い自閉症児であり、言語能力を欠いていたために捨てられた可能性や、発見時にオオカミの近くに偶然いただけかもしれないことなどが示される。断定を避ける慎重な筆致ではあるが、その推測は、オオカミの乳で人間は育てられないなどの生物学的な知見も踏まえて説得力に富んでいる。

「オオカミ少女伝説」の背景には人間を「聖別」したい願望があったのだらう。教育という特有の文化が万物の霊長たる人間をはぐくむと私たちは信じて疑わない。「伝説」はそんな「信心」に奉仕すべく創作された。他にもサブリミナル広告の危険性などさまざまな「定説」が作られた真相を暴いてゆく論考に触れると、なるほど人間は特殊な種なのだとあらためて思う。

人間的成長Ⅱ「社会化」とは自分の見栄みえや、世間の期待におもねるために、ウソをつく能力を備えることでもあるらしい。こうした人間ならではのリアリティを、意外な方向から隈取くまどりつてくれる一冊でもある。

武田徹・ジャーナリスト